



TITLE:

The Significance of Collaborative Learning in  
Foreign Language Education: A  
Sociocultural Perspective( Abstract\_要旨 )

AUTHOR(S):

Kurihara, Noriko

---

CITATION:

Kurihara, Noriko. The Significance of Collaborative Learning in Foreign Language Education: A Sociocultural Perspective. 京都大学, 2019, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2019-03-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k21844>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

( 続紙 1 )

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	栗原 典子
論文題目	The Significance of Collaborative Learning in Foreign Language Education: A Sociocultural Perspective (外国語教育における協働学習の意義－社会文化主義的観点から)		
(論文内容の要旨)			
<p>本学位論文は、外国語授業において協働学習が学習者に及ぼす影響を明らかにすることを目的としている。本論文では協働学習のさまざまな形態の中でも、とくに外国語（英語）ライティング指導における学習者間での相互の産出に対する批評を行う活動であるピア・レビューを中心に扱う。これは、外国語としての英語（English as a Foreign Language: EFL）、ならびに第二言語としての英語（English as a Second Language: ESL）におけるライティング指導法の一つであるプロセス・ライティングの構成要素として位置付けられる。同じくプロセス・ライティングの構成要素である教師のフィードバックの研究と同様に、ピア・レビューが学習者に及ぼす影響について扱った研究は数多く存在するが、ピア・レビューによる学習者の英語産出能力への影響を対象としたものは少ない。本論文は、日本の後期中等教育という文脈における学習者の英語産出能力に焦点を当てて、ピア・レビューの影響について質的および量的の両側面から分析を行ったものである。本論文は次の六つの章で構成される。</p> <p>第1章では、本論文の研究背景として、協働学習が教育のあらゆる段階および教科において行われている趨勢と、EFL/ESLの英語教育の文脈において指摘される協働学習の特徴を概観した上で、その理論的背景である社会文化主義について述べている。</p> <p>第2章では、本論文における理論的背景として、母語教育およびEFL/ESLの英語教育の指導法に社会文化理論が及ぼした影響、EFL/ESLのライティング指導における協働学習、さらに協働学習の一形態としてのフィードバックについて概観している。社会文化理論においてヴィゴツキーは、学習により生じた「最近接発達領域（ZPD）」にある学習者が発達に至るには他者の支援を必要とすると主張した。この理論に基づき、学習者間の相互のやりとりを重視した学習形態である協働学習を用いた指導が広汎に行われるようになっている。教師のフィードバックについては多くの研究が行われ、必要性和効果が認められている一方、学習者間のフィードバックについては、その効能および書き直しに与える影響についての研究が未だ十分でないことを先行研究の分析を通じて指摘している。これらの先行研究の分析に基づき、本章では学習者間のフィードバックの一形態であるピア・レビューが学習者の英語産出能力の育成に及ぼす影響を明らかにする必要性を主張している。</p> <p>第3章から第5章にかけては、ピア・レビューが学習者の英語産出能力の育成に及ぼす影響に関する実証的研究を扱っている。第3章では、後期中等教育の英語教育の教室に、教師とピアのフィードバックを含むプロセス・ライティングを導入することによって、学習者の意識および英語の産出における影響を探る実験を行い、その結果</p>			

について論じている。日本の普通科高校の二年生に属する参与者に、一年という長期間にわたるプロセス・ライティングの指導を実施した実験群と、従来型の教師主導の指導を実施した統制群とを対象に、学習者の変化を質的、量的に分析を行った。量的な分析結果として、実験群の産出内容については、事前と事後で有意な向上が見られ、また、統制群と実験群の間でも有意な差が観察された。質的な分析の結果としては、教師とピアのフィードバックに関する学習者の意識の変化と、双方のフィードバックが産出活動に及ぼした影響が明らかとなった。教師のフィードバックは英語産出過程において、とくに語彙使用の学習意欲を向上させるという影響を与えるが、学習者間のフィードバックでは、相互依存の関係によって読み手の意識と書き手の責任という側面が学習者の英語産出を促進させることが明らかとなった。

第4章では、高校三年生を対象として三ヶ月間のプロセス・アプローチを導入して実施された質的研究について論じられている。教師とピアのフィードバックに対する学習者の意識の違いと、ピア・フィードバックと英語産出能力との関連を調べるために、事前・事後のテスト、質問紙調査、およびインタビューが実施された。その結果、ピア・フィードバックを活用しようとする意識の高さとライティングの成績に相関が見られることが明らかとなった。ピア・フィードバックに意義を見出す学習者は、英語産出能力に大きな向上が見られる一方、ピア・フィードバックに否定的な姿勢を持つ学習者では向上が見られなかった。また、教師のフィードバックは学習者に広く信頼されていたが、英語産出能力向上の度合いを決定する要因にはなり得なかった。

第5章では、学習到達度が等しい高校三年生の二つのクラスを対象に実験群と統制群を用意し、三ヶ月間にわたる指導を行って、質的・量的に分析した結果を報告している。実験群と統制群ともにエッセイ・ライティングとそれに対する教師のフィードバックによる指導を実施し、それと並行する形で、実験群ではピア・レビューを導入する一方、統制群では文法・構文に対する指導のみを行っている。量的な分析として、両群に対する事前と事後、遅延テストの実施を行い、質的な分析としては、ピア・レビューにおける発話の録音やレビュー前後のエッセイのテキスト分析を行っている。実験群の事後テストの成績の分析結果より、ピア・レビューが産出能力に対して、正の効果をもたらすことが明らかになった。また、レビュー内容の質的分析によって、学習者の発話が産出された文章全体の構成や論理性に関する内容を多く含むほど、産出能力の向上に与える影響が大きいことも明らかとなった。さらに、テキスト分析とインタビューの分析結果より、ピア・レビューが学習者の英語産出能力を向上させ、成果物の質を向上させるメカニズムについて論じている。

最後となる第6章は全体の結論にあてられている。これまでの分析結果に基づき、外国語（英語）授業におけるピア・レビューの導入が、学習者に読み手としての意識を高めさせるとともに、書き手としての責任を自覚させることによって、ライティング過程における内省と自己修正を促すことで、産出能力の向上に繋がることを論じている。最後に、学習者間での協働学習が学習者の自律学習へと至る新たな外国語授業の可能性について言及している。

## (論文審査の結果の要旨)

本学位論文は、外国語授業における協働学習が、後期中等教育の英語ライティング授業の教室内環境において果たしうる役割について論じたものである。協働学習は、ヴィゴツキーの提唱した社会文化理論に基づくものであり、「学習が発達に至るためには他者とのやりとりが不可欠である」(Vygotsky, 1978)という信念が根底にある。外国語 (English as a Foreign Language: EFL) および第二言語 (English as a Second Language: ESL) としての英語におけるライティング指導において、協同学習は、近年、とくに広汎に行われているプロセス・アプローチの重要な構成概念である。プロセス・アプローチにおいては、概して「協働」というものが学習者にとっての「教師」と「ピア」という異なる対象からのフィードバックを意味している。教師とピアの両者、あるいはそれぞれによるフィードバックに関する先行研究は数多く、EFL/ESL文脈における学習者のピア・フィードバックと教師のフィードバックに対する意識の違いや、それぞれのフィードバックが書き直しに及ぼす影響などが明らかにされてきた。しかしながら、いずれのフィードバック研究においてもフィードバックそのものの効能に関しての分析や研究はいまだ十分に行われてはいない。

一方で、学校教育という観点からは、中等教育の外国語指導において産出を促すための効果的な指導法の模索が課題とされている。外国語によって積極的に産出させるために、学習者を中心に据えた指導法が提唱されているが、従前からの教師主導型の指導が主流を占める日本のような外国語の教室においては、学習者の外国語(英語)産出能力を向上させるには大きな課題があるのが現状である。本論文では、より効果的に学習者の産出能力を向上させうる指導法として、協働学習の一形態であるピア・レビューを教室に導入している。ピア・レビューは学習者によるピア・フィードバックの一形態であり、学習者が互いの書いた成果物(エッセイ)を読み、批評しあう活動で、学習者同士の評価が重要となる。ピア・レビューの結果として学習者に生じる変化を心理的側面と英語産出の能力的側面という異なる側面から観察し、測定することでピア・レビューの意義を論じている。

本論文の独自性としては、ピア・レビューという協働学習の形態が学習者の英語産出能力に及ぼす影響を、量的分析と質的分析の両面から論じたことである。学習者による批評の分析に関しては書面、もしくは口頭のいずれか一方による場合が多いが、本論文では学習者の批評内容と書き直しに至るプロセスを明らかにするため、両者を採用している。まず、量的分析として、ピア・レビューが学習者の意識に与える影響に関して、三つの視点からの分析をそれぞれ報告している。三つの視点とは、①長期的なプロセスの視点(実験1)、②学習者の短期的な意識の視点(実験2)、③学習者の短期的な活動プロセスの視点(実験3)である。長期的なプロセスに焦点を当てた実験1については第3章で、短期的な視点による実験2と実験3については、それぞれ第4章と第5章において報告している。

量的な研究では、もう一つ、それぞれの研究において事前・事後テストを行うことで学習者がピア・レビューを経験した後に、新しい英語を産出する能力がどの程度変化するかについて分析を行っている点が特徴として挙げられる。ピア・レビューが産出能力に及ぼす変化を調査した先行研究では、草稿版(事前)と修正版(事後)のエッセイを直接、比較する分析がほとんどであるが、本論文においては、学習者が新規に産出を行う際の言語運用能力の変化に焦点を当てて分析を行っている。これにより、学習者同士の相互の評価活動が学習者の言語運用能力にどのように影響を及ぼすかを明らかにしようと試みている。ピア・レビューが言語運用能力に及ぼす影響に関

する研究については、Lundstrom and Baker (2006) が存在するが、Lundstrom らの研究では、ピア・レビューに用いたエッセイは学習者が自分で書いたものではなく、また学習者同士でやりとりを行っておらず、本来の意味におけるピア・レビューの影響を論じているとは言い難いところがあった。しかしながら、本論文では第5章において、学習者間の相互のやりとりに注目し、ピア・レビュー時の発話分析を通じて、言語運用能力に与える変化を明らかにしており、この分析が本論文の特筆すべき点となっていると指摘しておく。また、ピア・レビュー前後のテキスト分析を行うことで、ピア・レビューが書き直しに及ぼした直接的影響についても明らかにしている。

質的研究に関しては、いずれの研究においても、質問紙および面接によって学習者の心理的側面を探り、ピア・レビューが英語産出に及ぼす影響を明らかにしている。実験2においては、参与者全員とのインタビューを実施し、それぞれの学習者のピア・レビューに取り組む意識を調べ、これと実際の取り組み方や学習者の到達度などを総合的に概観している。さらに、教師からのフィードバックとピアからのフィードバックのそれぞれに対する意識を比較して、ピア・レビューが学習者に及ぼす心理的な影響を調査している。実験3の分析では、ピア・レビューにおける全発話を分析することによって、ピア・レビューのやりとりを通して、学習者が受けている影響について論じている。これらの分析を通じて、ピア・レビュー中の特定領域に関する発話が学習者に大きな影響を与えていることが明らかとなった。

本論文の持つ独自性は後期中等教育という文脈で行われた研究である点にもある。ピア・フィードバックを含む一連のライティング・プロセスに関する研究の多くは、さまざまな制約から高等教育を中心に行われており、中等教育を対象としたものは少ない。とくに日本の英語教育では、大学受験が大きな位置を占めており、その対策が中心となる後期中等教育においては、ライティング指導が導入され難い状況に置かれている。さらに、このような状況においては、従来型の教師中心の授業形態を続けることがリスク回避に繋がると考えられ、学習者中心の授業は敬遠されがちとなる。本論文の研究は比較的小規模な集団を対象に行われたものであり、これらの知見があらゆる状況に当てはまるのかについては、さらなる研究を要するものであるものの、後期中等教育の教室においてピア・レビューを導入して得られた本論文の知見には、したがって大きな意義がある。本論文が明らかにしたピア・レビューが言語運用能力に及ぼす影響についての分析結果は、今後、日本における後期中等英語教育の教室現場へ協働学習を積極的に導入するきっかけになるものと考えられる。

以上のように、本論文は外国語教育において、ピア・レビューという協働学習の一形態が学習者の心理的側面だけでなく、言語運用能力の向上に貢献する可能性を明らかにした。ピア・レビューを導入することにより、学習者の言語運用能力が向上することを質的、量的の両側面から明らかにしたことは、学習者の英語産出能力の促進を狙う後期中等教育のみならず、これまで盛んに研究が行われてきた高等教育における英語教育にも大きな意義を持つものと考えられる。今後のさらなる英語教育の発展につながる研究であるとして高く評価できるものである。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成30年11月17日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

また、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：                      年              月              日以降